音　楽　科

音楽的な感受を支えに，
豊かに音楽表現し，聴き深める生徒の育成

**～感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程を重視した
学習指導の工夫・改善～**

附属函館中学校　　嶋　田　　歩

Ⅰ　はじめに

新学習指導要領では，２１世紀の教育環境を取り巻く知識基盤社会化やグローバル化という状況において，確かな学力，豊かな心，健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことの重要性を示している。また，平成２５年４月に中央教育審議会から示された第２期教育振興基本計画（答申）においても，４つのビジョン（基本的方向性）の１つとして社会を生き抜く力の養成について，幼稚園から高校までの段階において，生涯にわたる学習の基礎となる「自ら学び，考え，行動する力」等を確実に育てる，「生きる力」の確実な育成が求められている。これらのことを鑑み，本科では，「生きる力」を確実にはぐくむために，基本計画の施策に示されている，教育内容・方法の充実に関わる，新学習指導要領，ＩＣＴ（※Information and Communication Technology の略語。コンピュータやインターネットなどの情報コミュニケーション技術のこと，以下“ＩＣＴ”）の活用等や豊かな心の育成に関わる，伝統・文化教育等の事項を十分踏まえながら実践にあたることが肝要と考える。

さて，本校の本年度の研究主題は「今，求められる２１世紀型の学力の育成を目指して」である。本科では，本校の研究仮説「知識・技能を活用する力を育む学習指導の工夫・改善等を図ることにより，２１世紀型の学力を育み，質の高い教育を推進することができる」を検証すべく，教科での基礎的・基本的な知識・技能を活用した問題解決的な学習の工夫・開発および実践，自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力の習得を目指した教科における学習指導の工夫・改善，質の高い教育を保証するための検証改善サイクル（ＰＤＣＡのサイクルマネジメント）の整備，の３つの研究の重点のもと，本校が定義するところの「２１世紀に必要な学力」を，感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程を重視した学習指導の工夫・改善を図りながら，どのように身に付けさせていくのかについて研究実践を進めていく。

Ⅱ　研究の経過

１．　本科の研究主題について

本科では，平成１７年度から平成２２年度まで，主題「自分なりの音楽を追究し，豊かに表現する生徒の育成」の下，６年間継続研究に取り組み，生徒が「自分なりの音楽観（価値観）」を追究していく礎となる，知覚・感受力，表現力，鑑賞力，文化理解力，人間関係形成力等の育成を目指し，実践にあたってきた。

主な研究内容（平成２０年度，平成２１年度，平成２４年度は研究副主題）は次の通りである。

なお，平成２１年度と平成２２年度は，国立教育政策研究所（以下“ＮＩＥＲ”）教育課程研究指定を受

けての取組である。

＜これまでの主な研究内容＞
- ○　平成１７年度「自分なりの音楽をはぐくむ３つのアプローチ」
- ○　平成１８年度「自分なりの音楽と学習活動とのかかわりの明確化」
- ○　平成１９年度「自己の思いや意図をもって表現する力と自己の価値観をもって批評する力の育成」
- ○　平成２０年度「音楽科における言語活動の工夫」
- ○　平成２１年度「我が国の伝統的な歌唱及び鑑賞に関する学習指導の工夫」（ＮＩＥＲ研究指定１年次）
- ○　平成２２年度「我が国の伝統的な歌唱及び鑑賞に関する学習指導の工夫」（ＮＩＥＲ研究指定２年次）
- ○　平成２３年度「音楽的な感受を支えに，豊かに音楽表現し，聴き深める生徒の育成」
- ○　平成２４年度「音楽科における言語活動を通した思考力・判断力・表現力の評価について」

本科ではこれまで，「自分なりの音楽観（音楽に対する価値観）」を育てる観点から，１単位時間といった短いスパンはもとより，題材等を通して自分と音楽とのかかわりについて意識し，もっと長いスパン，すなわち生涯にわたって音楽を愛好していくための音楽と自分の接点を見付けることのできる生徒の育成を目指してきた。目指す生徒像は，自分の感情と重なり合った「自分なりの音楽観（音楽に対する価値観）」を追究していく生徒であり，様々な音楽活動をしていく根幹となる基礎的・基本的な諸能力について，自分に何が身に付いていて，何が身に付いていないのかを適切に自己評価することのできる生徒である。これらを追究していくことは，包括的に自己の感情をとらえることにもつながり，音楽科の教科目標にある豊かな情操を養うことに寄与していけるものと考えてきた。また，併せて「豊かに表現する」生徒の育成についても目指してきた。この「表現する」生徒とは，音楽表現のみならず，鑑賞活動においても感受した自己の内にあるものを，自分の感情の変化を踏まえながら，何らかの形（発話，批評文等）で外部に表出，表現させることのできる生徒という意味である。さらに，「知覚・感受する」，「思考・判断する」，「表現する」といった一連の学習過程はもとより，各題材を通して習得された知識・技能を個々に積み重ねていくだけではなく，それらを相互に関連させ活用することによって，「自分なりの音楽観」は培われていくものと考えてきた。新学習指導要領では，新たに，教科目標の中に「音楽文化についての理解を深め」ること，が規定されている。これは，表現及び鑑賞の幅広い活動を通して学習が行われることを大前提としており，「自己の思いや意図をもって」音楽表現するといった，音によるコミュニケーションを基盤とする音楽活動，すなわち音楽文化そのものを対象とした学習を通して，それらの理解を深めていくことが求められているのである。

このように，知覚・感受したことを基に，自分なりの思いや意図をもって音楽表現したり，味わって聴き深める力を育成することや，生涯にわたって音楽文化に親しむ態度を育成したりしていくことは，音楽教育の根幹を為す大切なことと考える。ゆえに，それらは，後述する本年度の研究主題「音楽的な感受を支えに，豊かに音楽表現し，聴き深める生徒の育成」においても継続している。

２．　昨年度の研究について

昨年度は，平成２３年度に設定した研究主題「音楽的な感受を支えに，豊かに音楽表現し，聴き深める生徒の育成」を継続し，副主題については本校の研究主題「言語活動を通した思考力・判断力・表現力の評価についての組織的な取組」を受け，「音楽科における言語活動を通した思考力・判断力・表現力の評価について」とし，実践した。取組にあたっては，平成２０年度からこれまで継続してきた「音楽科における言語活動の在り方」についての研究成果や課題を踏まえ，一昨年度からの継続として言語活動の重点項目に対する

評価方法についても開発を進めた。また，新しい学習指導要領で示されている，これからの中学校音楽科の学習指導と新しい学習評価のポイントに関する実践・研究を推進すべく，本科における言語活動を通した思考力・判断力・表現力に関する評価方法の工夫と開発についても取り組んだ。具体的には，新しい学習評価のポイントとして，「A表現」領域の学習と「B鑑賞」領域の学習を支える「音楽的な感受」を窓口に，感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程における学習指導とその評価を重視し，身に付けさせようとしている資質や能力を明確にした上で，評価規準の見直しや言語活動を通した思考力・判断力・表現力の評価方法の工夫・開発に取り組んだ。このことによって，新しい学習指導要領に定められた音楽科の目標等の実現状況をより適切に把握することができるとともに，音楽科における「思考力・判断力・表現力」に係る観点として位置付けられている「A表現」領域の「音楽表現の創意工夫」に係る力や，「B鑑賞」領域の「鑑賞の能力」と「音楽表現の技能」に係る力についても相互にかかわらせながら伸ばすことができるものと考えた。また，これら３つの観点と密接に結び付いている「音楽への関心・意欲・態度」についても，学習指導とその評価に係る課題を捉え，改善を図り，歌唱，器楽，創作で豊かに音楽表現する，自分なりに批評をし，よさや美しさなどを味わって聴き深めるといった意味ある学習にしていくことで，主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする態度を育てられると考え，実践にあたった。

昨年度の成果と課題としては，思考力・判断力・表現力を育成する視点から，学習の展開を段階的に捉え，音楽的な感受を基に，思考・判断し，表現するといった一連の学習過程の中で，言語活動を意図的・計画的に位置付けることができたこと。また，指導と評価の一体化を図る年間指導計画・評価計画を改善していく中で，新しい学習指導要領の各領域の指導事項に照らし合わせ，どの場面でどのような手段をとるのかを整理し，明確にすることによって，より言語活動を通した具体的な学習指導や評価方法等を構想することができたことがあげられる。一方，課題としては，仮説の中ほどに付け加えた，「思考力・判断力・表現力を適切に評価し」の部分について，思考力・判断力・表現力の評価の妥当性・信頼性を高めること，評価の回数や内容を精選すること，評価規準に照らした生徒一人一人の形成的な評価や工夫ある指導を十分行うこと，学習指導の展開の中に焦点を絞った評価を位置付けること，長期的な視点でそれらを見取る評価方法の工夫・開発等について課題が残った。

Ⅲ　本年度の研究

本年度の研究は，研究主題「音楽的な感受を支えに，豊かに音楽表現し，聴き深める生徒の育成」を継続し，副主題については本校の研究主題「今，求められる２１世紀型の学力の育成を目指して」及び副主題「知識・技能を活用する力を育む学習指導の工夫・改善」を踏まえ，「感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程を重視した学習指導の工夫・改善」とした。

本科では，昨年度，前述したように「言語活動を通した思考力・判断力・表現力に関する学習指導や評価方法の工夫・改善」に取り組んできた。本年度は，これまでの取組を踏まえた上で，２１世紀型の学力を育むべく，本科において課題発見能力，問題解決能力等をどのように育成していくかについて，「A表現」領域の学習と「B鑑賞」領域の学習を支える「音楽的な感受」を窓口に，一連の過程における，感性を高める（「音楽的な感受」と知識・技能の結び付きから課題を発見する）場面，思考・判断し，表現する（習得した知識・技能を活用して問題を解決する）場面における学習指導の工夫・改善に取り組んでいる。

Ⅳ　教科研究仮説

１．　研究仮説について

本年度の研究主題は「音楽的な感受を支えに，豊かに音楽表現し，聴き深める生徒の育成」，副主題は，「感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程を重視した学習指導の工夫・改善」である。

これと本校の研究仮説である「知識・技能を活用する力を育む学習指導の工夫・改善等を図ることにより，２１世紀型の学力を育み，質の高い教育を推進することができる」を基に，Ⅲに示した研究の方向性を踏まえ，研究仮説を「音楽的な感受を支えとして感じ取ったことを基に，感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程を重視した，知識・技能を活用する力を育む学習指導の工夫・改善を図ることにより，主体的に歌唱，器楽，創作で音楽表現する力や，自分なりに批評をし，よさや美しさを味わって聴き深める力を育てることができる。」とした。また，副主題については本年度，主として，感性を高める（音楽的な感受と知識・技能の結び付きから課題を発見する…「課題発見能力」）と，思考・判断し，表現する（習得した知識・技能を活用して問題を解決する…「問題解決能力」）を培う学習指導の工夫・改善を基軸に実践・検証していくことを意味している。研究主題と研究仮説との関連について，次に図示する。

研究主題「音楽的な感受を支えに，豊かに音楽表現し，聴き深める生徒の育成」

手段（波線の部分）　　期待する成果（下線の部分）

研究仮説「音楽的な感受を支えとして感じ取ったことを基に，**感性を高め※1，思考・判断し，表現する※2**一連の過程を重視した，**知識・技能を活用する力を育む学習指導の工夫・改善**を図ることにより，**主体的に歌唱，器楽，創作で音楽表現する力や，自分なりに批評をし，よさや美しさを味わって聴き深める力を育てる**ことができる。」

※１　音楽的な感受と知識・技能の結び付きから課題を発見する力（課題発見能力）

※２　習得した知識・技能を活用して問題を解決する力（問題解決能力）

図１　研究主題と研究仮説との関連図

２．　研究仮説に基づく実践例

(1)　基礎的・基本的な知識・技能を活用した問題解決的な学習の工夫・開発および実践

本科においては，総論で説明されている「問題解決的な学習の一般的な流れ」を踏まえつつ，教科として重視している，感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程とのかかわりから，音楽的な感受を支えとして感じ取ったことを基に，課題を発見させる場面や習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して問題を解決させる（表現領域では音楽表現を高める，鑑賞領域では主体的に味わって聴く，といった）場面を設定し，実践にあたった。以下に鑑賞領域での実践例を示す。

○　題材名　『音色と響き』　（第３学年）

○　題材について

本題材では，「ボレロ」（ラヴェル作曲）の鑑賞活動を通して，音楽を形づくっている諸要素を知覚・感受しながら，曲の構成を理解し，音色や音量の変化による曲想の変化や楽器の多様な組み合わせによる響きの美しさや音楽表現の豊かさを味わわせる。ここでは，学習指導要領の「Ｂ鑑賞」（１）のア　音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き，根拠をもって批評するなどして，音楽のよさや美しさを味わうことについて，〔共通事項〕のうち音色，リズム，速度，旋律，強弱などを窓口に学習を展開する。具体的には，第１時に楽曲全体の鑑賞を通して，キーワード（音楽を形づく

っている要素等）を基に知覚・感受した内容を整理し，課題（疑問点）を発見する。第２時～第４時では，楽曲のよさや美しさについて，グループでの交流や自分なりに設定した鑑賞のポイントを踏まえて聴く活動を通して追究する。第５時には，学習のまとめとして再び「ボレロ」の鑑賞を行い，「自分にとっての価値」について述べられるように，聴き深めさせる。

○　題材の指導目標

・　楽曲の雰囲気や特質に関心をもち音楽を形づくっている諸要素のかかわりや楽曲の構成を知覚・感受する学習に主体的に取り組ませる。（音楽への関心・意欲・態度）

・　知覚・感受した音楽の諸要素を基に，曲想とのかかわりを理解させ，音色や音量の変化による曲想の変化や楽器の多様な組み合わせによる響きの美しさや音楽表現の豊かさを味わわせる。（鑑賞の能力）

○　題材の評価規準

・　楽曲の雰囲気や特質に関心をもち音楽を形づくっている諸要素のかかわりや楽曲の構成を知覚・感受する学習に主体的に取り組んでいる。（音楽への関心・意欲・態度）

・　知覚・感受した音楽の諸要素を基に，曲のしくみを理解し，音色や音量の変化による曲想の変化や楽器の多様な組み合わせによる響きの美しさや音楽表現の豊かさを味わって聴いている。（鑑賞の能力）

○　指導計画　（５時間扱い・・・・本時２／５）

題材	指導目標	主な学習活動	時数	《基礎的・汎用的能力との関連》
音色と響き	①楽曲の雰囲気や特質に関心をもち音楽を形づくっている諸要素のかかわりや楽曲の構成を知覚･感受する学習に主体的に取り組ませる。	・「ボレロ」を聴き，キーワードを基に感じ取った内容を整理し，曲想と音楽を形づくっている諸要素とのかかわりから課題（疑問点）を見つける。	1	【自己理解・自己管理能力】【課題対応能力】
	②曲想と音楽を形づくっている諸要素とのかかわりを理解させ，楽曲のもつ音楽の美しさや良さを考えさせる。	・グループに分かれ，楽曲の美しさや良さについて交流を通して，追究する。	3 本時 2/5	【人間関係形成・社会形成能力】【課題対応能力】
	③曲想の変化や楽器の多様な組み合わせによる響きの美しさや音楽表現の豊かさを味わわせる。	・まとめの鑑賞として「ボレロ」を聴き，楽曲のもつ美しさや音楽表現の豊かさを味わい，自分にとっての価値を考える。	1	【キャリアプランニング能力】

キャリア教育における位置付けから育成すべき能力や態度

○　本時案

１　題材　　「音色と響き」

２　学習目標

知覚・感受した音楽の諸要素を基に，曲想とのかかわりを理解させる。【鑑賞の能力】

３　学習の展開

○学習活動	○教師のかかわりと◆留意点	○評価規準と（評価方法）
○前時までの学習内容を振り返る。	○前時までの学習についてワークシートをもとに振り返らせる。	

○本時の学習目標を把握する。	○本時の学習目標を提示し，本時の学習の見通しをもたせる。	
自分の課題を解決するために，鑑賞のポイントを設定して，鑑賞しよう。		
○グループに分かれる。	○グルーピングの意図について説明し，グループを発表する。 ◆グループ内（１グループ６～７名）に各キーワード（リズム，旋律，楽器・組み合わせ，テンポ，強弱）を選択した生徒ができるだけ偏りなく含まれるように教師がグルーピングする。	
○自分の選んだキーワードとその理由についてグループ内で交流し，課題を決定する。 ○鑑賞のポイントを考える。 ○グループ内でそれぞれが考えた鑑賞のポイントについて交流する。 ○「ボレロ」の鑑賞	○グループ内で，自分の選んだキーワードとその理由について交流させ，課題を決定させる。 ◆交流が円滑に行われるように支援する。 ○自分の課題を解決するために，どのようなことに気を付けて鑑賞すればよいか（鑑賞のポイント）を考えさせる。 ◆一例を示し，課題（疑問点）解決のための鑑賞のポイントを設定する流れをとらえさせる。 ○グループ内で，自分の考えた鑑賞のポイントを説明・交流させる。 ◆各グループをまわり，指導する。 ○自分の設定した鑑賞のポイントを意識して「ボレロ」を鑑賞させる。	○知覚・感受した音楽の諸要素を基に，曲のしくみを理解することができる。 【鑑賞の能力】 （観察，ワークシート） グループ内交流の様子
○本時のまとめ	○ワークシートに本時の鑑賞のまとめを記入する。 ◆次時の学習内容について説明する。	

(2)　自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力の習得を目指した学習指導の工夫・改善

本科では，これまでも自分の思考や感情と向き合う，あるいは自らを研鑽するという視点も取り入れて研究にあたってきた。適宜，生徒の学習状況を踏まえ，自らの思考や感情を律することや自らを研鑽することの取組の大切さについても指導している。

また，題材によっては，自らの感情の変容等に向き合うという観点から，次頁に示した図２のようにワークシートに学習活動と自分の感情とのかかわり・変化等を記述するといった工夫も試みている。さらに，本校がとらえる２１世紀型の学力の中で自己管理能力の具体的な要素の１つとして示されている忍耐力としての「意志力（やり抜く力）」についても，本科では，その育成について全領域で意識して取り組んでいるところである。

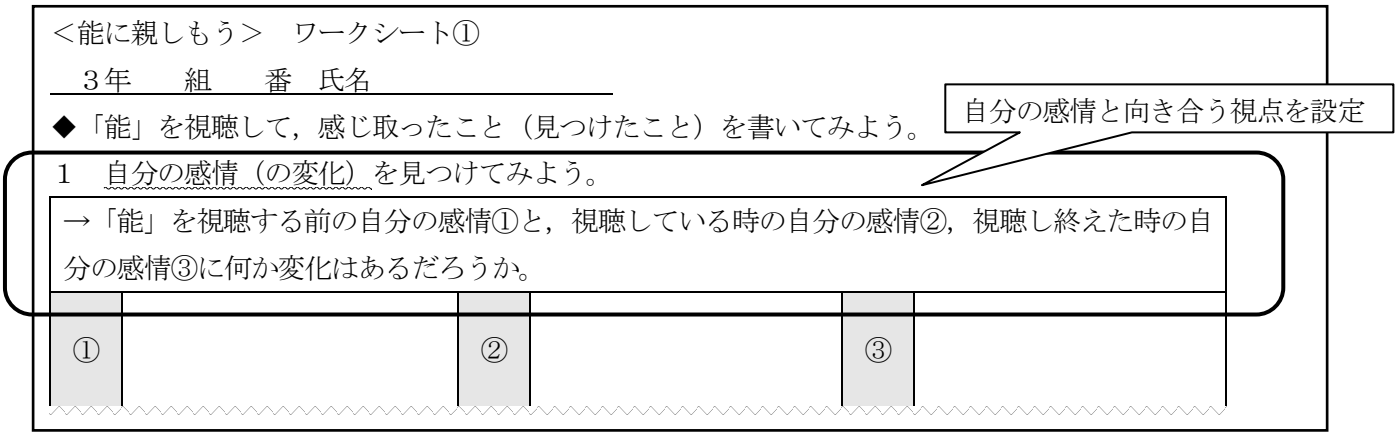

図２　自分の感情の変化等を記述するワークシートの例（一部抜粋）

(3)　質の高い教育を保証するための検証改善サイクル（ＰＤＣＡのサイクルマネジメント）の整備

昨年度までの研究では，思考力・判断力・表現力の育成を意識し，指導目標と評価規準がしっかり対応した形になるように計画全体の見直しを行い，指導と評価の一体化が図れるように，評価方法を盛り込んだ年間指導計画の作成に取り組んできた。本年度は，この研究を生かしながら，本校のキャリア教育全体計画のもと，各教科で求められている，個性や能力の伸長を目指すべく，個々の課題発見や問題解決を支援し，学ぶ楽しさや成就感を体得させる中で，思考力を培い，生涯を通じて学びを継続していく資質・能力を育てること，学ぶことの意義について身を持って体得させ，社会生活や将来の職業生活における必要性や有用性を認識させることを念頭に，本科におけるキャリア教育を位置付けた年間指導計画の作成に取り組んだ。ここでは，学年ごとのキャリア重点目標も踏まえつつ，題材ごとに育成すべき能力や態度（基礎的・汎用的能力）を整理し，音楽的な感受を基に，思考・判断し，表現する一連の過程を重視した学習指導の工夫・改善との関連も図った。

Ⅴ　仮説の検証

本科の研究仮説「音楽的な感受を支えとして感じ取ったことを基に，感性を高め，思考・判断し，表現する一連の過程を重視した，知識・技能を活用する力を育む学習指導の工夫・改善を図ることにより，主体的に歌唱，器楽，創作で音楽表現する力や，自分なりに批評をし，よさや美しさを味わって聴き深める力を育てることができる。」を，本校研究の３つの重点に沿って検証する。

１．　基礎的・基本的な知識・技能を活用した問題解決的な学習の工夫・開発および実践

本科では，基礎的・基本的な知識・技能を活用した問題解決的な学習の工夫・開発の切り口として，本科が重視している，感性を高め，思考・判断し，表現する一連の学習過程とのかかわりを基軸として，実践に取り組んだ。具体的には，一連の学習過程の中に意図的・計画的に，音楽的な感受を支えとして感じ取ったことを基に，課題を発見させる場面や習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して問題を解決させる（表現領域では音楽表現を高める，鑑賞領域では主体的に味わって聴く，といった）場面を設定した。前述した実践例（題材「音色と響き」：第３学年）の第１時では，楽曲全体の鑑賞を通して，キーワード（音楽を形づくっている要素等）を基に知覚・感受した内容を整理し，課題（疑問点）を発見させ，第２時に自分の課題を解決するために，鑑賞のポイントを設定して，鑑賞させた。以下は，第２時の自分の課題を決め，鑑賞の

ポイントを設定させる学習場面の流れとその際の検証である。

◇第１時に自分が選んだキーワード（音楽を形づくっている要素等）とその理由について，グループ内で交流し，この曲のよさや美しさを理解するために，自分の課題を決める。

「課題を発見し，自分のものにする」段階として，グループ内で交流し，他者と情報交換をする等の，学び合う場を充実させたことにより，多様な生徒の発想を引き出すことができた。

◇自分の課題を解決し，この曲のよさや美しさを理解するために，どのようなことに気を付けて鑑賞すればよいか（鑑賞のポイントを）設定する。

生徒が学習過程で解決すべきこと，解決に必要な情報の収集，条件の整理等が見通せるように，参考として選択課題をワークシートの裏面に掲載したことで，個人の鑑賞ポイントをスムーズに設定することができた。

このように自分なりの課題や鑑賞のポイントを設定するといった課題（問題）の発見・理解の過程を経て，鑑賞するという流れの基，実践に取り組むことができた。今後，問題解決的な学習についてこのような取組を各題材で行うことにより，その積み重ねが音楽的な感受と知識・技能の結び付きから課題を発見させる力（課題発見能力）や習得した知識・技能を活用して問題を解決させる力（問題解決能力）を育み，主体的な鑑賞，すなわち自分なりに批評をし，よさや美しさを味わって聴き深める力や主体的に歌唱・器楽・創作で音楽表現する力を育てることにつながっていくものと考える。

２．　自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力の習得を目指した学習指導の工夫・改善

本科がめざす，主体的に歌唱，器楽，創作で音楽表現する力や，自分なりに批評をし，よさや美しさを味わって聴き深める力は，自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力の習得が大きく関わるということが，鑑賞領域における前述したワークシートへの生徒の記述内容の変容や表現領域における音楽表現の創意工夫や技能の見取り等の実践から改めて確認することができた。「音楽的な感受」が本科の学習の支えとなっているため，総論で述べられている「感じる力」をキャリア教育の自己理解・自己管理能力という視点から取り組んだことは大きな意味があると考える。生徒が感じ取ったことを基に，表現するためには，さまざまな技能が必要となる。その技能の習得には，自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力の習得が必要不可欠である。あきらめずに歌唱練習に取り組むこと，課題解決（自分の設定した鑑賞のポイント）のために聴き澄ますこと，それらは紛れもなく「意志力（やり抜く力）」が必要となる。本校が行った基礎的・汎用的能力に関するアンケート結果では，学年が低いほど，自己理解・自己管理力が低いことがわかった。そのことが実感できる事例も近年多くなってきている。この「意志力（やり抜く力）」をはじめとする，自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力の習得は，容易なものではなく，長期間の取組が必要となる。研究協議会の際の教師のブレーンストーミングで得られた内容や他教科で［長期・短期］，［実技・筆記］の２軸からの俯瞰的なとらえ方をもって実践している取組も参考に，学習指導の工夫･改善を一層図っていきたい。

３．　質の高い教育を保証するための検証改善サイクル（ＰＤＣＡのサイクルマネジメント）の整備

これまであった評価計画を位置付けた年間指導計画を生かしながら，本年度はキャリア教育における位置

付けから，題材ごとに育成すべき能力や態度（基礎的・汎用的能力）との関連を整理した。作成した年間指導計画については，今後，実践しながら，生徒の実態や発達の段階に適切に応じているかといった評価も踏まえながら，題材ごとに振り返り，修正する等の改善を図っていきたい。検証場面としては，課題発見能力や問題解決能力を見取る問題の作成，実施等に取り組んでいる。検証改善サイクルの整備については，評価を充実させるためのＩＣＴの活用について先進的な取組をしている理科のようにタブレットＰＣ等を活用した授業評価も視野に入れ，質の高い教育を保証できるようにしていきたい。

Ⅵ　成果と課題

成果としては，仮説の「知識・技能を活用する力を育む学習指導の工夫・改善」の部分の具体について，音楽的な感受を基に，思考・判断し，表現するといった一連の学習過程の中で，音楽的な感受と既習の知識・技能の結び付きから課題を発見させる場面と学習を通して習得した知識・技能を活用して問題を解決させる場面を意図的・計画的に位置付けることができたことがあげられる。このことによって，実践例の生徒の記述（下記参照）にあるように，生徒一人一人が曲のよさや美しさを理解するために，主体的に自分の課題や鑑賞のポイントを設定して鑑賞する（味わって聴き深める）ことにつながった。また，キャリア教育を位置付けた年間指導計画の作成に関わって，題材ごとに育成すべき能力や態度（基礎的・汎用的能力）との関連を整理することで，指導のねらいや手立てを明確にすることができた。

【鑑賞曲（ボレロ）のよさや美しさを理解するために生徒が設定した課題と鑑賞のポイントの例】
（Ａさん）課題：ボレロの中にでてきた楽器の組み合わせや旋律と伴奏の関係をつきつめる。
⇒鑑賞のポイント：主旋律とそれにはまっていない感じがする部分を演奏している楽器が何か，主旋律を複数で演奏している楽器の組み合わせは何か，旋律から伴奏系に変わる楽器は何か。
（Ｂさん）課題：旋律・楽器の組み合わせを用いて，どのような工夫をしているのか。
⇒鑑賞のポイント：旋律の調は何なのか。また，どこで転調してどんな変化があるのか。主旋律はどの楽器で，同時に演奏している楽器は何なのか。
（Ｃさん）課題：作曲者であるラヴェルが，それぞれの楽器の組み合わせによってどのような雰囲気を出そうとしたのか調べる。
⇒鑑賞のポイント：組み合わせによって曲の雰囲気はどう変わるのか。サクソフォーンの音が聴こえたのでその部分をよく聴いてみたい。組み合わせは何人くらいでやっているのか。ソロなのか複数なのか。

校内研でのＩＣＴ活用の様子

一方，課題として残ったのは，教科指導におけるＩＣＴの活用があげられる。本科では，題材の特性を踏まえた上で，コンピュータや提示装置などを活用する学習に際しては，生徒の興味・関心を高めるために，また，生徒一人一人に課題意識を持たせるために，効果的にわかりやすく提示することを心がけている。

しかし，主に本校が本年度全生徒に導入したタブレットＰＣの活用という視点においては，本校が目指すところの「生徒一人一人に課題を明確につかませるためのＩＣＴ活用」と「評価を充実させるためのＩＣＴの活用」のいずれにおいても，他教科に比べ

大きく遅れをとっている感は否めない。本科の目標に向かって学習を進めていく際に，どのような題材のどのような授業場面でＩＣＴを効果的に活用するべきか等，先進的に活用している英語科，理科，数学科を参考に，その活用の仕方や指導方法の改善について，早急に検討していく必要がある。

課題発見能力や問題解決能力を見取る問題についての作成，実施等から得られた課題について，１学期末に実施したテストの「音楽表現の創意工夫」に関する問題の正答率から分析する。出題した問題の正答率が，それぞれ，３年生が全体の４７％，２年生が全体の４９％，１年生が全体の２６％であった。問題の内容や難易度，解答の仕方等によって単純に数値での比較はできないかもしれないが，明らかに１年生については，２，３年生に比べて著しく回答率が低い結果となった。逆に言えば，１年生よりも２，３年生の方が，課題発見能力や問題解決能力に資する評価数値が高いという結果としても見取ることもできる。また，この結果は，昨年度実施したテスト問題の正答から得られた思考力・判断力・表現力に資する評価数値の２，３年生が高かったという結果ともほぼ同じ傾向ととらえることができる。このことは，本校が行った基礎的・汎用的能力に関するアンケート結果が，学年が低いほど，自己理解・自己管理力が低いことと少なからず相関しているものと考える。このように，昨年度までの研究で明らかになってきた思考力・判断力・表現力，そして本年度の研究の主柱である課題発見能力や問題解決能力，「意志力（やり抜く力）」をはじめとした自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力の習得は容易なものではなく，長期間の取組が必要となる。したがって，長期的な視点でそれらの力を見取るための工夫・改善等を行うといった，質の高い教育の推進のために継続して実践すべき課題がいくつも残った。

Ⅶ　おわりに

本年度は，主として，２１世紀型の学力を育むべく，本科において課題発見能力，問題解決能力等をどのように育成していくかについて，「音楽的な感受」を窓口に，思考・判断し，表現する一連の過程における学習指導の工夫・改善に取り組んできた。これまでの成果と課題を踏まえ，これからも日々の実践の中で，本科の目標に迫るべく，生徒が音楽的な感受を支えに，豊かに音楽表現したり，聴き深めたりしていけるように，研鑽に努めていきたい。

（文責　　嶋　田　　歩）

＜参考文献＞
・中央教育審議会（平成 25 年４月）「第２期教育振興基本計画」（答申）